

臨床研究「不安定型頬骨弓骨折に対する Transmalar pinning 単独固定の有用性」

について

筑波大学附属病院形成外科では、標題の臨床研究を実施しております。

本研究の概要は以下のとおりです。

① 研究の目的

頬骨弓は頬の高さを支えており、顔貌に影響する部位です。頬骨弓部は癒痕が目立ち、顔面神経を損傷する可能性があるため、整復操作のみで直接骨を固定を行うことは一般的ではありません。しかし、頬骨体部、頬骨複合体という広範囲に顔面の骨折を合併するような場合には、それらを固定することで頬骨弓を間接的に固定することで頬骨弓の安定化を図ることになります。しかし整復後に陥凹変形が生じやすい場合があるため、有効な骨固定法が必要となります。

固定法としては頬骨を含む顔面骨治療はプレートを用いることが一般的です。プレート固定は骨折部の引き寄せ、段差の修正には有用な固定法ですが、プレートと骨との結合、支点と作用点の関係から、有効に整復力が発揮できない骨折の状態が存在します。これまで当科ではそのようなプレート固定には不適であると思われる一部の不安定型頬骨弓骨折に対してはワイヤーのみを用いて頬骨を固定する transmalar pinning 単独固定を行ってきました。本研究では transmalar pinning 単独固定を行った症例を検討し、その有用性と適応となる骨折型を明らかにします。

② 研究対象者

2011年1月から2021年2月に頬骨弓（頬骨）骨折に対して手術を行った患者さん

③ 研究期間

倫理委員会承認後～2021年9月30日まで。

④ 研究の方法

患者さんの診療録、臨床写真を用いて⑤の項目について後ろ向きに調査し、収集した情報の解析を行い、transmalar pinning 単独固定の有用性と適応となる骨折型を明らかにします。新たに追加検査を行うことはありません。なお、診療情報はすべて個人が特定できないように匿名化します。

- ⑤ 試料・情報の項目
- ⑥ 骨折の状態、整復方法、transmalar pinning 固定の状態、術中の整復位の確認方法、術後の整復位などについて調査します。
- ⑦ 試料・情報の第三者への提供について
提供しません。
- ⑧ 試料情報の管理について責任を有する者
筑波大学 形成外科 講師 佐々木薫
- ⑨ 本研究への参加を希望されない場合
患者さんやご家族が本研究への参加を希望されず、試料・情報の利用又は提供の停止を希望される場合は、下記の問い合わせ先へご連絡ください。すでに研究結果が公表されている場合など、ご希望に添えない場合もございます。
- ⑩ 問い合わせ連絡先
筑波大学附属病院 305-8576 茨城県つくば市天久保 2-1-1
所属・担当者名：形成外科 担当 佐々木薫
電話・FAX：029-895-3122
対応可能時間：平日 9～16 時